HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	震災等の復興における観光創造とは
Author(s)	真板, 昭夫
Relation	自然災害復興における観光創造 = Natural disaster recovery and Tourism creation
Citation	CATS 叢書, 9, 3-7
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61156
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS9_02maita.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

西山徳明，西川克之，花岡拓郎，平井健文編
『自然災害復興における観光創造』
CATS 叢書第 9 号: 1 章 3-7，北海道大学観光学高等研究センター（2016）

震災等の復興における観光創造とは

真板 昭夫
北海道大学観光学高等研究センター特任教授

今回の研究会の開催にあたって，「自然災害復興における観光創造とは」というテーマを設定いたしました。まず疑問として提起したいのは，震災復興の中で声高に叫ばれた観光の役割についてです。国土交通省などが「観光によって地域振興を行う」「可及的速やかに地域を立て直す」と声高らかに宣言したのですが，そこで提示されたのは，いかにその地域に人を送るか，そしていかに地域にお金を落とすのかというものでした。しかし，単に人を呼ぶ，お金を落とすということが，本当に被災地における観光の役割なのでしょうか。観光が，そのようなことを通して本当に地域を救うことができるのでしょうか。このように申し上げるのは，かつて私は 2 度の震災で被災した経験があるからです。その時に，外の人が被災地を見に来ることが迷惑に感じられました。もっとも記憶に残っているのは，長靴をもらったことで，これでさまざまな復旧作業ができたことの方がありがたかったのです。

こうした個人的な背景もあって，今後に自然災害が発生した際に，いったいどのような観光の役割があるのだろうか，あるいはどのような観光を創造することが必要なのかということを，全国の研究者や自治体関係者などと議論してみたいと考えたことが，今回の研究会のきっかけです。本日ご出席されている室崎先生とシンポジウムを開催した際には，都市計画関係者の出席が多く，高台への避難や移転の計画ばかりが提示され，私は違和感を覚えました。いったいそこに住んでいる人たちの権利，意思，文化，定住してきたことの生き甲斐は，本当にこうした計画で守れるのか。逆に高台に移転することで，地域社会を破壊することに繋がるのではないかという危惧すら覚えました。こうした中，休憩時間に室崎先生から「観光という問題は大きいのではないか」と問題提起され，震災復興における観光の役割について，やはり今日ご出席の海津先生と共著で，本の 1 章を書かせていただきました。これも今回の研究会の契機の 1 つです。

皆さまご存知のように，日本は亜寒帯から亜熱帯に至るまで，南北に細長い国であり，さまざまな自然と向き合っています。そのため，世界でも認められるほどの多様な文化があり，その文化によって人々はその地域に生きることに喜びを感じ，生活を営み，さまざまな生きる知恵というものを生み出してきました。しかし，後にご説明するように，日本は世界有数の災害大国でもあります。日本人はこれにめげずに，災害とも向き合ってさまざまな知恵を蓄積して今日まで生き延びてきたという誇りと，その誇りによって形づくられた文化が各地域に存在し，それを利用しながら復興してきたという歴史をもっているのです。

そこで改めてこの場に全国の研究者にお集まりいただき，この誇りと文化を利用しながら復興してきたという歴史をふまえて，この復興に観光が果たしうる役割と可能性につい

て国内外の事例を多角的に取り上げることによって理解し，そしてその意義やそのあり方について論議したいというのが今回の問題提起です。

特に，今回私が念頭に置いているのは，東北における東日本大震災からの復興です。都市型災害と違い，生産活動によって結びつきを形成してきた「地域への帰属性の強い農漁村」を含むというのが特徴です。このような地域の再生，つまり帰属意識や産業と地域の繋がりが強い地域での，観光による復興のあり方を考察したいと考えています。東日本大震災は，気象庁の「震災後生活意識調査」には「未曽有の国家危機」と表現されていますが，「甚大な経済的損失」「失われる人々の絆」「地域文化資産の喪失」など，スライドでご覧いただいているようなさまざまなインパクトを地域に及ぼしました。震災後の地域の人たちの基本的な生活意識として，もちろん「生活の安定」が第一ですが，他に「周囲の人との関係性」を大切にして取り戻したいというものが挙げられています。地道に従来の産業に根ざし，帰属した社会の中における生活を元に戻したいと。それと同時に，これが重要な点ですが，被災しながらも「人の役に立ちたい」「社会に貢献したい」という回答も目立ちます。こうした意識に対して，果たして観光はどのよう関わることができるのかという問題があるかと思います。

ここで，東北地方の観光資源の特性をお話しします。皆さま，震災の時にテレビを見て驚かれたかもしれませんが，東北では，地域の中で人々の絆を深めてきた祭りや伝統産業が，地域の生産活動と結びつきながら多く維持され，維持されることによって地域の活性化が為され，さらなる生産活動へと結びつくという循環が行われてきました。ともすると，青森のねぶた，秋田の竿灯，仙台の七夕などにのみ目が向いてしまうのですが，これら以外にも東北地域では実に多様な祭りや伝統産業が多く存在します。このように考えると，東北における観光資源の最大の特色は，1 次産業の生産活動の結果から生まれているという点にあります。裏を返せば，観光が 1 次産業の生産活動の活性化に結びつけること，そしてこれを持続しない限り，それは単なるヨソからの押しつけです。「小さな親切，大きなお世話」にすぎないということです。

東北の文化特性は，「お裾分け（生産圏）文化圏」という点にあります。現在私は，「一料亭一地域主義」を掲げ，震災に遭った地域の特産物を京都という一大観光都市の有名料亭に送り，被災地域の農産物のステータスを高めようという取組みを進めております。しかし，実はその過程に大変な過ちがありました。たとえば東北からウドなどの山菜を京都に送り，何とか使ってもらえませんかと頼んだところ，有名な料亭がそれを快諾してくれました。ところが，運び込んだ後でその料亭から電話があり，申し訳ないが送ってきてくれたものをすべて捨てさせてほしいと言われたのです。なぜかと聞いたところ，京都は「おもてなし文化」が重要であり，たらふく食べさせることが目的ではないと。つまり，三口以内で食べられる大きさでないと料理には使えないということです。京都とはそういう街なんですよと。一方で東北では，「たくさん食べさせることが命の維持に大事」だからと，とにかく大きく育ったものを送るわけです。小さいうちに送るのはもったいな

いと思うのです。他にも，私はギョウジャニンニクが大好きで，京都で一，二を争う天ぷらのお店に届けたところ，「先生，食べにおいでになりませんか」と電話がかかってきました。ただし，時間は夜の 10 時過ぎに来てほしいと。これは店が閉まる時間なんです。そこで，店を訪ね天ぷらを揚げてもらったところ，非常に美味しかった。しかし，「先生，これはうちでは使えません」と。「なんでですか，こんなに美味しいじゃないですか」と問うたところ，美味しいことと京都の文化に合うということは違うのですと言うのです。「うちのお客さんは芸姑さんです。はぁーと息をしたらニンニク臭かったら大変です」と（会場笑）。美味しいことと誰が食べるかということは違い，どういうもてなしのためにその素材を使うのかが大事なんです。また，ギョウジャニンニクを揚げると，その香りと味が油に移るので，その油はまったく使えなくなるそうです。このようなことがたくさんありました。

そこで気づいたのは，京都のような都市の観光理念は「おもてなし文化観光」です。相手に喜んで食べてもらう，その時の「喜び」は場所によって違うわけです。東北は，とにかくたくさん作り，その分をたらふく食べさせることで相手を幸せにしようとする「お裾分け文化」です。東北の観光による復興を考えていく時，このような文化に対する価値観の違いを観光の中で融合させること，そして戦略的に違う文化を繋げていくことが重要であると考えています。

ここで，東北における自然災害の歴史を概括してみます。先ほども述べましたが東北には，繰り返し起こる震災と津波，そして飢饉という自然災害ですべてを失っても，日常生活の営みと生産活動を一体のものとして維持してきた歴史があります。こういうことが起きればこうしよう，これを使えばいい，という災害を越えて巧みに生きる知恵が東北には蓄積されています。これ自体が，外から来る人に対しての観光資源としてきわめて重要なものになります。言い換えれば，東北は 1,000 年の時を経ても受け継がれる誇り，すなわち自然災害を乗り越えてきた知恵と文化に結ばれてきた帰属意識の強い協働型社会であるということです。これをどのように人びとにアピールし，それを活性化させるために観光と結びつけるかが重要だと考えております。お示ししたスライドは，これまで東北がどれだけの震災に遭ってきたのか，年表形式にまとめたものです。今回の東日本大震災では，人口の数パーセントが亡くなられたと言われていますが，歴史を振り返れば，人口の 20，30 パーセントが亡くなるような震災も起きています。さらに，これに加えて飢饉という大きな問題があります。東北では干ばつによる飢饉が多発し，それにより多くの方が亡くなっています。こうした震災，津波，飢饉という問題を東北は乗り越え，巧みに生きてきました。そして，巧みに生きることの象徴として，伝統芸能や文化などのさまざまなものがあったのです。そこに私たちが行き，素敵な風景だと感じても，その風景でさえ人々との関わりによって生まれたものなのです。

先ほどの飢餓の話に戻りますと，過去には約 25,000 人，61,000 人がそれぞれ亡くなるような飢餓が起きています。よその村からある人が訪ねて来て，お願いだから何か食べさ

せてくれと言った時に，ここから集落に入られれば我々の食べ物がなくなると拒絶し，その集落の入り口で多数の人が亡くなったという話が残っています。ここには「飢餓塚」というものが建てられ，その集落のいわば償いとして現在も存在しています。

では，生き延びるためにどのような知恵が蓄積されているのか。スライドでご覧いただいているのは『民間備荒録』の表紙です。荒れたことに対する備えをどのようにすべきかという記録が残され伝承されているのです。これを読んだ時，私は涙を流しました。第 1 章は土の食べ方なんです。土を水の中に入れてかき混ぜ，上の水を捨てろと。それを 7 回繰り返し，最後に沈んだ部分を食べろと書いてあります。土の食べ方が決まっているんです。他に，山菜の食べ方も指南されています。山には，非なるものと可なるものありと。可なるものとは，神様から東北で生き延びるために授けられたもので，このように料理しなさいと書かれているのです。私は植物学を専門にしていましたので，そのデータ，分類法を確認しました。驚いたことに，そこに載っていたのは，現在のテレビ番組が紹介するような山菜料理なんです。すなわち東北では，山菜というものは，人に向けて出すことが主たる目的ではなく，飢饉などの備えとして残すものであり，だからこそ山や雑木林を大切にしてきたという知恵の発露なのです。こうしたものを，どのように観光客に伝え，東北の文化や歴史に結びつけるのかということが大事であると思います。

以上のことを前提にすると，震災復興のロードマップの中で，観光とはおそらく初期には位置づけられないものでしょう。人命救助などが先です。しかしその後に，ボランティア・ツーリズムや，長期的な視点で復興に取り組むためには，観光はさまざまな仕組みを提供できるのではないかと思っています。問題は，復興プロセスの中で，観光の中身や観光の果たす役割は変わるということです。その変化に適応しながら，いかに私たちは観光を地域に結びつけるのかということを考えなくてはいけません。

ここでまとめに入りたいと思います。私たちはともすると，被災地に対して，自分たちの力や知識で何とかして「あげなければ」，あるいは「可哀想だ」という気持ちを寄せて，さまざまな手段で自らの経験に従って，押しつけをしがちです。しかし，当の地域にとって，それは「小さな親切，余計なお世話」です。大切なことは，地域の中で引き継がれてきた誇りとしての価値，文化，伝統に私たちが寄り添い，地域住民の思いを高める「支援」という視点の中で関わるということです。これらを踏まえれば，地域の観光による復興支援とは，誇りを軸とする帰属意識の維持と，再生への支援としての観光のあり方こそが課題ではないかと考えています。先ほども申し上げましたが，復旧から復興，振興へと時間が経過する中で，観光支援のあり方と役割は変わるでしょう。その時間軸に沿って持続化させていく観光戦略として，一時的な観光に終わらせないことです。つまり，そこで地域自らが興す観光へと発展させることが肝心です。国の支援がなくなれば観光が終わってしまうのではなく，室崎先生も私も本の中に書きましたが，大事なのは第一に計画論的発想に基づくロードマップの策定と目標の共有です。そして，第二にそれを上手に進めていくための組織をどのように作るか，そして第三に活動支援を持続化させるために，

人々を鼓舞，叱咤する運動展開をどのようにしていくのか，第四にその枠組みとしての制度論的な論議と詰めが大切です。

以上このような点に着目し，「地域に出来るだけ寄り添いながら進める」，という新たな観光創造による地域復興の意義と役割について，この研究会で論議していただければ嬉しく思います。以上です，ありがとうございました。